

第3回防災講演会の報告

(公社)日本技術士会近畿本部(登録)防災研究会

開催日 : 平成27年2月26日(木) 19:00~20:00

開催場所 : 日本技術士会近畿本部会議室

参加者数 : 20名

1. はじめに

平成27年2月26日(木)午後7時より、近畿本部会議室において「第3回防災講演会」を開催した。防災研究会では、会員の皆様へのCPDの一環として、また防災に関わる関係者の方々との交流の場として「防災講演会」を開催している。今回は第3回目として、建設部門・応用理学部門の技術士で気象予報士の大藤明克氏を講師としてお迎えし、「頻発する豪雨と土砂災害」と題して講演して頂いた。講師の貴重な経験を通じて、ゲリラ豪雨の発生予測の現状と課題や今後の予測の在り方が報告され、豪雨災害への防災対策に大いに参考となるものであった。



講演会の様子

2. 講演概要

近年、極端に大きい短時間雨量や総雨量をもたらす事例が頻発しており、これまでの観測記録を更新する地点が多くなっている。2013年は、沖縄から北海道まで全国の130地点を超える気象庁の雨量観測点で観測史上1位の時間雨量を更新する豪雨があり、特に、短時間の豪雨の発生回数が増加してきている。これら最近の豪雨に伴う土砂災害発生事例を参照しながら、現状の課題をまとめ、今後の減災への取組みについてソフト面から考察を行った。



講演される大藤講師

土砂災害の死者数は、ハード・ソフト対策の進展等により、全体的には減少傾向にある。件数の多い「がけ崩れ」を例に豪雨の頻度が同程度の年(時間50mmの1年当たりの頻度が100以上200未満)を比較すると、「がけ崩れ」による死者数は、平成以降と以前を比較すると約3分の1となっており、対策の効果が読み取れる。しかし、近年は豪雨の増大により、死者数の多い年が増えている。平成以降のがけ崩れによる死者数は豪雨の頻度に比例しており、がけ崩れによる死者数は過去に近い水準まで増えてきた。

「伊豆大島土石流災害」の課題は、避難勧告・避難指示を出さなかったことである。「兵庫県丹波市土砂災害」の課題は、①福知山市内の洪水についての報道が主となっており、丹波市の土砂災害の報道の扱いが少なかったこと、②降雨情報を注視していたものの予測は難しく、さらに夜間に住民に対し避難を促すことも難しかったことである。「広島県広島市土砂災害」の課題は、①避難勧告・避難指示発令の遅れ、②現象が発生する直前の土砂災害警戒情報の発表、③未明の避難勧告・避難指示の発表などである。

土砂災害は、それぞれの斜面における植生・地質・風化の程度、地下水の状況等に大きく影響されるため、個別の災害発生箇所・時間・規模等を詳細に特定することはできない。また、技術的に予測が困難である斜面の深層崩壊、山体の崩壊、地すべり等は、土砂災害警戒情報の発表対象とはしていない。

3. おわりに

講演会後に、懇親会を兼ねた交流会が開催され参加者相互の交流を深めた。

(文責 南側晃一)